

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 7 月 14 日	
所属部局・職	霊長類研究所・博士課程 3 年
氏名	豊田有

<b>1. 派遣国・場所</b> (〇〇国、〇〇地域)
日本・香川県小豆島
<b>2. 研究課題名</b> (〇〇の調査、および〇〇での実験)
小豆島実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 7 月 7 日 ~ 平成 29 年 7 月 9 日 ( 3 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
小豆島銚子溪 自然動物園 お猿の国
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回の実習では、小豆島銚子溪 自然動物園 お猿の国で餌付けニホンザルの観察をおこなった。観察の目的は、自身が現在研究している同じマカク属のベニガオザルとの比較の観点から行動を観察し、その相違点を再認識することであった。</p> <p>ここ小豆島のニホンザル集団は、特に冬季に、おおきなサルダンゴを形成することで有名である。京都嵐山のニホンザルの観察の印象では、ダンゴを形成するために密に凝集する必要があるため、サルダンゴを形成する構成員は多くは血縁関係にある個体同士であることが多い。一方で、小豆島の個体群の場合、複数の個体、というより群れ全体が大きなサルダンゴを形成する。つまり、血縁関係のない個体を含む多数の個体が、体を寄せ合うという現象であり、その親和性、寛容さ、凝集性の高さは、“専制的社会性”をもつニホンザルらしからぬものであるとして、注目されることがある。</p> <p>小豆島のニホンザルが「寛容的である」のかについては議論が多々あるし、それは他のマカク属種との比較の観点からというよりはむしろ、ニホンザル種内での地域変異という観点から語られることが多い。しかし私の今回の観察を通じて、ベニガオザルとの比較の観点から小豆島のニホンザルを見ていた印象は、とても寛容性が高いとは言いにくく、むしろ嵐山や高崎山のニホンザルと大差ないのでは、というものであった。</p> <p>もちろん細かい行動をつぶさに観察すれば地域による差は検出できるであろうが、例えば餌がまかれた時の群がり方、そこで起きる攻撃交渉の起き方や持続時間、頻度といったものをとってみても、一般的に寛容性が高い“平等的社会性”をもつとされるベニガオザルのそれとはまったく異なるものであり、他の野猿公苑のニホンザルとそっくりであるという印象を持った。</p> <p>もっとも今回の実習は冬季ではないので、大きなサルダンゴは観察されなかったし、もしかしたら季節によってサルたちの行動が違う可能性もあるので、その点は注意する必要があるが、改めてベニガオザルの寛容性の高さを実感することができた。種が持つ社会性というのは、特殊な行動に現れるよりむしろ、日常のごく自然な行動に現れるものであると思うので、こういう単一種を見ているだけでは気づきにくい特徴に今回改めて気が付くことができたのは、大きな成果であった。</p>
<平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: <a href="mailto:report@wildlife-science.org">report@wildlife-science.org</a>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真は木陰で休息するニホンザルの母子。この季節はサルダンゴの形成はほとんどないようで、巨大なサル団子の写真は撮影できなかった。豊田撮影。

撮影情報：Nikon D500, NIKON AF-S NIKKOR 80-400mm f/4.5-5.6G ED VR, 1/250, f5.6, ISO 100

6. その他 (特記事項など)